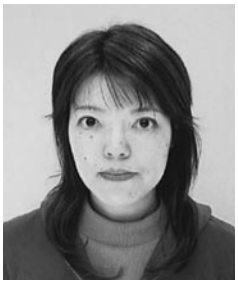
COMMUNI STATION
あなたと豊橋市国際交流協会をリンクする会報紙
［コミュニステーション］
2012 Apr.
VOL.91

Essay。エッセイ



「にほんごきょうしつ」今昔

財団法人豊橋市国際交流協会
日本語指導ボランティア
星野　理佳

豊橋市国際交流協会主催の「にほんごきょうしつ」は、日本語部会に所属するボランティアの手で運営されております。私がこの「きょうしつ」の門戸をたたいたのは、平成11年。ヨーロッパ11か国に単一通貨ユーロが導入され、プロ野球では、西武ライオンズに松坂大輔投手が入団した年でした。それからいつの間にか十二支も一巡してしまいました。今回は、ボランティア教師としての視点から、これまでの「にほんごきょうしつ」の変遷などをご紹介したいと思います。

ある日、私は駅で日本語を話せない外国人が、駅員さんと意思疎通できずに困っている場面に遭遇しました。その時、何の役にも立てない自分に歯がゆい思いをしました。日本で暮らす外国人が生活の中で不自由を感じない程度の日本語習得のお手伝いができたらと思ったのが、私がこの活動を始めたきっかけです。当初は、ほぼマンツーマンに近いレッスンであったため、不安で一杯の新人ボランティアの私にとっては、グループレッスンより馴染みやすかったと思います。数回先輩ボランティアのレッスンを見学した後、おっかなびっくりの状態で初めてレッスンをした日のことは、今でも懐かしく思い出されます。しばらく経過した平成12年4月から、土曜日・日曜日の「きょうしつ」は、生徒数の増加により、日本語能力別にグループレッスンを行うことになりました。当初は、初級A～Eの5クラス、個別での漢字指導と日本語能力試験対策を行っていました。その後学習者のニーズの多様化に伴い、入門クラス及び中級クラスが創設され、今では11クラスにも増加しました。ボランティアには、限られた期間で自分の担当する課程を終了し、学習者が次のクラスで苦労しないようにすることが求められます。当初は、年間4学期制で1期のレッスン数が少なく時間的余裕がないため、ボランティアにとっては負担となっていました。しかし、平成17年度から年間3学期制に改められ、1期のレッスン数が増加し、その負担もかなり緩和され、余裕のある授業ができるようになりました。

続いて学習者の移り変わりについて触れたいと思います。平成20年9月15日のリーマンショックは記憶に新しいことと思います。この影響が「にほんごきょうしつ」にも少なからずありました。豊橋市に住むブラジル人人口は、平成20年のピーク時には12,939人でしたが、現在では約8,300人と約3分の2に減少しています。このピーク時には、年間900人以上の受講者があり、1人のボランティアが20人程度の学習者を指導するなど、もはやグループではなくクラスでのレッスンになってしまう状態でした。しかも、限られた教室で複数のクラスを同時に行うために声を張り上げて授業をせざるを得ず、授業を終える頃には声が枯れてしまったことも今では懐かしく思い出されます。学習の目的にも変化が感じられます。当時は日系南米人が多く、生活のために日本語を勉強する人が目立ちましたが、現在では受講者数も550人程度と日系人を中心に減少する一方で、アジアからの研修生が増え、スキルアップのために学ぶ姿が目につきます。このように時代とともに「にほんごきょうしつ」も変化をしています。

自分が指導した学習者が進歩していく姿を見ていると、子供の成長を見守る親のような心境とでも言うのでしょうか、ボランティア冥利に尽きる思いです。これがあるからこそ長きに渡りこの活動を続けられるのだと思います。ご興味のある方は、是非一度見学にいらしてください。お待ちしております。